

## 中国語の日本語訳文に潜むジェンダー

任 利

現代中国語では、日本語のように話し手の性別によって、人称代名詞や文末表現を変えることがない。しかし、日本人中国語学習者による中国語の日本語訳文を見ると、以下のような興味深い現象が観察される。

例えば、中国人の男性も女性も使用できる中国語の一人称代名詞“我 wǒ”に対して、日本語訳としては、「わたし」、「わたくし」、「ぼく」、「おれ」、「あたし」、「わし」など、様々な訳し方がある。また、中国人の男性にも女性にも使用できる中国語の二人称代名詞“你 nǐ”に対しての日本語訳としては、「あなた」、「あんた」、「きみ」など、様々な訳し方がある。つまり、話し手の性別によって日本語への訳し方が変化するのである。

さらに、以下の例文（1）のように、男性が話し手の場合、文末に「かい」をつけ加えたり、（2）と（3）のように、話し手が女性の場合、中国語の一人称代名詞“我”を「あたし」に訳したり、名詞の前に「お」をつけ加えたり、文末に「わ」、「かしら」を付け加えたりする現象が見られる。

（1）“真的吗？”（中国語原文『ともだち・朋友』朝日出版社）

「本当かい？」（学習者の日本語訳文）

（2）“给你肉。我来烤蔬菜。”（中国語原文『ともだち・朋友』朝日出版社）

「あなたにお肉をあげるわ。あたしは野菜を焼くわ。」

（学習者の日本語訳文）

（3）“在这儿可以放焰火吗？”（中国語原文『ともだち・朋友』朝日出版社）

「ここで花火をあげられるかしら？」（学習者の日本語訳文）

中国語教育現場では、日本人学習者は学習言語としての中国語原文の言い

方や文法構造にとらわれず、日本語のいわゆる「男ことば」、「女ことば」のような言い回しを選び出して訳している傾向が見られる。

本発表は、日本人中国語学習者による中国語文の日本語訳文を調査し、いわゆる日本語の「男ことば」、「女ことば」のような言い回しがどのように使われているのか、具体的には「人称代名詞」、「終助詞」、「感嘆詞」、「疑問・質問表現」、「命令表現」、「依頼表現」、「禁止表現」など七種類の表現の、使用頻度および場面を分析することによって、日本語訳文に潜むジェンダーを考察するものである。

結果として、上記の七種類の表現にはいわゆる役割語としての「男ことば」、「女ことば」のような言い回しが多く使用されることが分かった。このような言葉遣いは実際の日本人の会話ではほとんど存在しないが、日本人中国語学習者の中ではステレオタイプとしての「男らしい」「女らしい」言葉遣いとして認知されている。それは日本のテレビやアニメ、漫画や物語の登場人物の言葉遣いから影響を受け、無意識的に身につけたといえる。

外国語の学習においては、役割語としての「男ことば」、「女ことば」は確かに効率よく分かりやすく伝達を行うという優れた一面もあるが、しかし、言語上のステレオタイプの言い方が過剰に使用されるとジェンダーの観点から偏見があると受け取られる恐れもある。現代日本語では話しことばの中に男女差はほとんどなくなっているが、中国語のような外国語を学習する場合、翻訳された日本語訳文には未だにジェンダーが潜んでいるということが指摘できる。これまで中国語のような外国語教育の現場における役割語使用の危険性を追究した研究はまだ少なく、今後さらに研究を続けていく必要がある。

## [引用文献]

金水敏編 (2011) 『役割語研究の展開』くろしお出版。

Edwards, John (1985) *Language, society and identity*. Oxford: Basil Blackwell. Ltd.

(にんり・東京農工大学准教授)